



竹内宏 (たけうちひろし)

ジーアンドティー代表取締役。1961年生まれ。1980年にマツダオート大阪へ入社し、1984年に独立し保険代理店兼中古車販売業を営む傍ら、カーディテーリングに触れる。1987年に廃業し、テロソンコーポレーションのグループ会社にカーディテーリングの本部社員として入社。大手カー用品店にコーティングビジネスを提案し、自らも実験店で現場作業に従事する。その後自動車補修用品の営業経験を積み、2003年に再び独立してジーアンドティーを設立。サンマイツ社サンドペーパーの東日本代理店として磨き関連商品を販売しながら、講習会を開催するなどアフターケアを重視した営業手法を展開している。



[第6回] ゴミが多く肌が荒れた塗膜の磨き方

現場の技術者が最優先する的是「作業時間の短縮」

6・7月には、高崎、富士宮、柏崎で講習会の講師を務める機会がありました。新人研修、新車保管車の磨き、経験者対象の補修塗膜の磨き講習と、それぞれ異なる内容でしたので、説明するポイントも随分違ってきます。新人にはスピードよりも確実に仕上げる方法を。新車の磨きは保管時の汚れの内容を見極め可能な限り削る量を抑える方法を。そして経験者はスピードを重視し無駄のない工程を作るため…と、参加者それぞれの事情に合わせて説明しました。

これら講習の中で難しいのは、やはり補修塗膜の磨きです。参加者の話を聞くと、ブースの有無、乾燥機の違い、ゴミの付き具合、肌の状態など条件がまちまちで、唯一共通しているのは「作業時間の短縮」です。やはり現場は、仕上がり品質を重視しながらもスピードを最優先していることを改めて痛感しました。

ピンポイントではなく一定の面積を均等に磨きゴミを処理する

さて、今回は、やや肌が荒れていって、ゴミが10個以上付いている塗膜を想定します。この程度ならまだピン

ポイントにゴミを取る方が多いでしょうから、全面にペーパー掛けはしていないと仮定します。

次にクリヤーの硬さですが、3:1でやや硬めとします。この前提条件ならば、コンパウンド磨きだけで肌調整ができると判断します。もし、さらに肌が荒れてしまった場合は、細かい番手で全面ペーパー掛けてしまった方が結果的に作業時間は短くなるでしょう。

それでは、作業に入りましょう。今回はゴミが多めなので、ペーパー目をピンポイントで磨くのは非効率です。なおかつ、肌目もしっかり調整する必要がありますので、肌を落としながら同時にペーパー目を処理するイメージで作業します。バフは毛足の短いウルバフ、コンパウンドは細目が適当かと思います。ペーパー目を意識せずに、ボンネットであれば半分から1/4の広さに区切りまんべんなく磨きます。

ここでのポイントは、いきなり本磨きせずに、低回転でゆっくりコンパウンドを延ばし、軽めに磨いたその後で少し加圧力を高めて磨きます。乾燥した塗膜は、最初のうちはコンパウンドがスリップしやすく削れにくいので、軽く磨くことによって足が付いた状態になり、その後本磨きすることで効率良く研磨できます。ある程度肌が落ち



ゴミが塗膜に多く付着している場合はブツ取り用具で処理した後、ポリッシャーで塗膜全体を均等に磨く

たらペーパー目は8割方消えているはずですので、この工程は余力を残して終わり、次の工程に進みます。

ペーパー目を消す時も、肌を落とす時も、細目のコンパウンドを使う場合は、8割方を目安に作業します。理由は、極細目または微粒子で磨く際の研削分を考慮して、細目のバフ傷を研磨する分、削り過ぎを防止するためです。

今回の前提条件で、もし肌が整っていたら、毛足が長めのウールバフを使って、肌の落とし過ぎを防止します。ある程度肌調整ができた後、残ったペーパー目の処理と最終の肌調整を同時にいます。バフは毛足の短いウールバフ、コンパウンドは極細目が適当です。極細目のコンパウンドでは、肌を調整するには研削力不足ですが、すでに最初の工程で塗膜はほど良く磨き傷が付いており削れやすい状態にありますので、若干の調整は容易に行えます。この工程で95%仕上げるつもりで丁寧に磨いてください。

無理に2工程で仕上げるのではなく段階的に行う3工程の磨きで作業時間短縮

ここで、ポリッシャーの動かし方とバフの當て方をおさらいしましょう。ポリッシャーは研磨する時はゆっくり移動させ、仕上げに近づくにつれやや移動速度を早くします。ゆっくり動かせば、力を入れなくとも同じ場所をバフが何回も擦るわけですから、研削力は上がります。半面、研磨部分に熱が出やすいので、仕上げる際は移動速度を速めることで熱の発生を抑え、バフの擦れ傷を防止します。

バフは、平らに研磨面に当てハンドルを軽く塗膜方向へ押すことにより、角が立たず適度な圧力が加えられ、研削力と仕上がりのバランスが良くなります。これらに注意してこの工程を行えば、濃色車でも通常の照明なら完全

に仕上がった状態に見えるでしょう。

最後に仕上げ工程です。この状態では、直射日光に当てるとき細かいバフ傷が目立つはずです。しかし心配はいりません。丁寧に磨かれた極細目のウールバフの傷は均等で浅く、スポンジバフと微粒子コンパウンドを使えば簡単に消すことができます。可能であれば専用のライトで確認しながら、この最後の工程を行って下さい。そうすれば、屋外に出してから磨き直す必要がなくなります。

「なんだ、結局3工程なら普通の磨き方と変わらないじゃないか」と思う方もいらっしゃるかもしれません、各工程の配分を変えることで、トータルの作業時間は短くなり、仕上がりのばらつきも少なくなるはずです。無理に2工程で仕上げようとするより、結果的に作業時間を短縮できます。

硬いクリヤーには サンドペーパーを 活用し肌調整を楽に

また、2:1などの硬いクリヤーの場合は、やや肌が荒れた程度でもペーパーを活用した方が効率的です。このようなクリヤーは、塗装の段階で肌を作り、ゴミも少ない環境で作業するのが前提の製品ですから、サンドペーパーの活用はあくまでトラブルシューティングと考える必要があります。

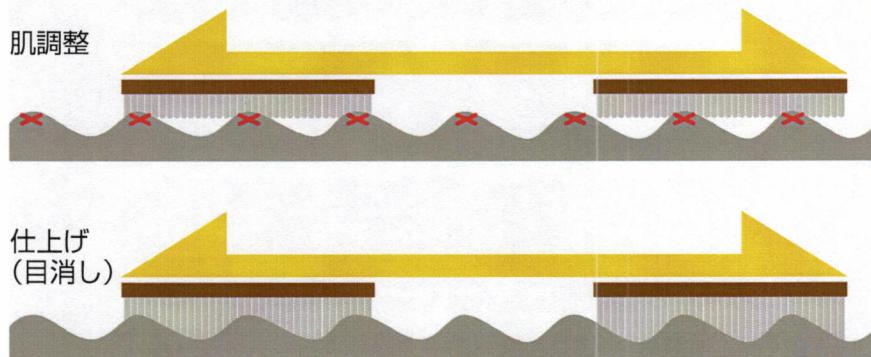
現場に出向くと、サンドペーパーで肌調整をするのを嫌う方が多くいらっしゃいます。理由を聞くと、ペーパー目が消えないことと、肌が鏡面になることを心配する方が大半です。

結論を言えば、荒れた肌をコンパウンドだけで落とす時間があれば、ペーパー目は充分に消せます。仮に残っても、次の工程で消せます。あとはサンドペーパーを掛ける時間ですが、ほんの数分です。違いはその次の工程で現れます。

コンパウンドだけで大きく肌調整を行うには、非常に粗めのタイプを使用することになりますが、ペーパー目の処理だけであればさほど粗いコンパウンドを使う必要はありません。どちらが仕上げに時間がかかるか想像してみてください。

また、鏡面になってしまったのは、ペーパー目を消す時に毛足の短いバフで、粗いコンパウンドを使用して強く磨き込むことが原因です。そのバフ目を取ろうとさらに磨き込み、仕上がったころには、削り過ぎで肌が落ち過ぎてしまうのです。

この場合は、毛足が長めのバフと適度な粗さのコンパウンドで磨けば、肌は残るはずです。「百聞は一見に如かず」、まずは試してみてください。上手くサンドペーパーを活用すれば、思いのほか作業が楽になります。



毛足の短いウールバフ（上）及び毛足の長いウールバフ（下）を用いた磨き作業のイメージ図